

神道政治連盟国会議員懇談会
活動報告

「御代替」

「現代の」がたち「を考える」



神道政治連盟国会議員懇談会
活動報告

「御代替」

「現代の」がたち“を”考える」

ごあいさつ

昨年十二月「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」に基づく御退位の日が閣議決定され、今上陛下におかれましては明年四月三十日に御譲位遊ばされることとなりました。

明年の御代替について、政府では、本年一月に「天皇陛下の御退位及び皇太子殿下の御即位に伴う式典準備委員会」を立ち上げ、四月には基本方針を発表しました。今秋には、御代替の諸儀式等の大綱を決定するため内閣総理大臣を委員長とする「式典委員会」が、また、各府省の連絡を円滑に行うため内閣官房長官を本部長とする「式典実施連絡本部」が設置されます。

神道政治連盟国会議員懇談会では、この機にあたり、皇室の伝統と皇位の重みを尊重した御代替の諸儀式等のあり方について、一層理解を深め、会員相互で認識を共有するべく、勉強会を開催し、此度、その記録を取り纏め、報告書を発行する運びとなりました。明年の御代替を考える上の一助として、本会員はもとより、神社関係者をはじめ、多くの皆様に御高覧いただければと存じます。

結びにあたり、御多忙のところ御講演を賜りました先生に御礼申し上げ、御挨拶と致します。

平成三十年六月吉日

神道政治連盟国会議員懇談会 会長代行 中曽根弘文

目次

平成三十年四月十二日(木)勉強会 報告／講師浅山 雅司先生(神社本庁総合研究部長心得)	P01
「御代替」について
平成三十年五月十五日(火)勉強会 報告／講師浅山 雅司先生(神社本庁総合研究部長心得)	P15
「御代替」についてⅡ
資料	P32

「御代替」について



一昨年、今上陛下のビデオメッセージという形でおことばが発せられ、以降、国はもとより神社界の中においても、このことをどのように考えれば良いかなど、議論や検討がされてきました。神社本庁内でも、今回のおことばにもとづいて、皇室のことをどのように考えるのか、陛下の御位をどのように考えるのか、研究会等を開催しながら、検討して参りました。本日は、ほんの一部になります。来る御代替についてお話しをできればと思います。

今日の資料の中には「御代替」とありますが、皆さんは、これをどのように読まれるでしょうか。私はこれを「みよがわり」と読みます。しかし、最近のテレビ報道やコメント等では、これを「おだいがわり」と読んでいるのを耳にします。たしかに漢字で書けば同じですが、意味は大きく異なります。「おだいがわり」では「だいがわり」の敬語です。天皇が御位を離れ、「御代」が替わることが、単に会社の社長が変わるような「だいがわり」で良いのでしょうか。まずは、そうではいけないとの認識を持っていただくことが大事であると思います。

さて御代替について取り上げる上では様々なポイントがありますが、今回は、①何を基準(前例)にすれば良いのか、②諸儀式をどのように理解すれば良いのか、③改元をどのように考えれば良いのか、以上三点について、お話ししたいと思います。



◆何を基準(前例)とするのか【P49 図1】

時代に応じた新しい形を求めて、過去を顧みずゼロベースで新たな儀式を考えていくならば、過去の事例や歴史、伝統は参考になりません。

皇室の伝統に則り、かつ現代にあった形にアレンジを加えるにしても、どの例を参考にするかによって、大きく形は変わってきます。それぞれの時代には、それぞれの事例があり事情や状況が違います。前例ということだけが百パーセント大切というわけではなく、これまで積み重ねられてきた歴史、伝統が大事であるのだと思います。また千年以上前の例を先例とするのか、それとも中世の事例を先

例とするのかなども、種々考えられますが、はたしてそのような突然の「先祖返り」ができるのでしょうか。例えば、平安時代の例があるからといって、現代の私たちが当時と同じような生活ができるでしょうか。やはり、現代に最も近い例であり最も整備された例こそ、現代に即した形であるといえるのではないかと考えております。

その視点に立つならば、明治以降の旧「登極令」【P33資料1】があった時代、この時代の例こそ最も良い例と考えるべきでしょう。また、近々の例を参考に、現代にあったアレンジを加えるとするならば、今上陛下の御代替の例が最も参考になると思います。但し、今上陛下の御代替は、「讓位(退

位」の御代替ではありません。そうであるならば、「讓位（退位）」が行われた最も近い事例を参考に検討することも大切であると思います。

「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」に関する神社本庁の基本的姿勢」【P41資料2】でも、「皇室制度上で最も整備された旧登極令等の規定に準拠することを第一に執行されるべきである」と明記しています。また、平成二年五月に示している「即位礼・大嘗祭・大饗祭に関する神社本庁の基本姿勢」の中でも、「登極令の規定に準拠することを第一の原則とし、可能な限りこれに則って執行されるべきである」と明記しています。今般、政府内に設置された式典準備委員会で示された「基本方針」でも、基本的な考え方については、同じであると思います。「基本方針」の中では、各式典の挙行に係る基本的な考えとして「平成の御代替わりに伴い行われた式典は、現行憲法下において十分に検討が行われた上で挙行されたものであることから、今回の各式典についても、基本的な考え方

内容は踏襲されるべきものであること」と示されています。つまりは、平成の御代替を手本とし、基本的には踏襲されるべきであると明確にしているので、これから、今般の御代替は平成の例を参考に行われることになると思います。

当時も御代替の形をめぐっては、現行憲法下においてどのように適合させ行うべきなのか等、様々な議論がありました。平成への御代替では、近々の例であった、昭和天皇の御代替の例を参考にしながら、準備が取り進められました。そして、昭和天皇の御代替は、大正天皇の御代替を手本とされており、昭和、大正の二代の御代替では、明治に整備された登極令などにもとづいて諸儀式等が行われています。登極令は、明治天皇の御代替の事例を精査し定めたものです。明治天皇の御代替が完了した明治四年から、登極令が整備された明治四十二年まで、およそ四十年という長きにわたり皇室の伝統が検証され、法律として登極令は制定されました。無論、登極令は近世以前の御代替を

検証した上で、制定されています。

近世の御代替について、特に大嘗祭に限定していえば、百十三代東山天皇の御代に再興されています。百三代の土御門天皇の大嘗祭斎行以降、十代にわたり大嘗祭は行われず、不完全な形での登極（即位）となりました。土御門天皇以前は、古来の例に倣い、時代に応じたアレンジを加えながら、諸儀式が斎行されてきました。

この間、何故、大嘗祭が斎行されなかったかといえば、応仁の乱以降、朝廷の力が衰微し、乱世となったことが、一つの理由といえます。そのような時代を経て、江戸幕府の時代に入り太平の世となり、朝廷は力を取り戻し、徐々にこれまで行ってきた儀式を復活させようとする研究がはじまります。そして皇室の歴史と伝統をもう一度考え直すとする機運が高まってきました。そういった経緯もあり、百十二代の靈元天皇の御代に三百年以上中断していた「立太子」が復活しています。そして、大嘗祭も東山天皇への御代替において復興

されました。その後も百二十一代の孝明天皇の御代まで、皇室の伝統の考証が行われ、明治の御代においては、日本の近代化に伴い、これまで不文律だったものをしっかりと形に残し後世に伝えていくとする機運が高まり、その成果として、旧皇室典範や登極令、その他宮務法が整備されたのです【P49図1】。

一方で、国憲として、大日本帝国憲法が定められました。尚、旧皇室典範と大日本帝国憲法は、何れも明治二十二年に定められています。この二つの法の下で、皇室の歴史や伝統が明文化された時代を迎えました。しかし、昭和二十年の終戦を経て、民主主義の世の中には合わないという理由で旧皇室典範をはじめ、各宮務法は廃止をされてしまいました。以降、日本国憲法が制定され、憲法より下位の法律として現在の皇室典範は制定されています。戦前の皇室典範と戦後の皇室典範では、その法律の性格が異なるということを御理解いただければと思います。

皇室の伝統を継承する上で、戦前までは、旧皇室典範や登極令、その他宮務法により行われてきたものが、現在は、「慣例」にもとづいて継承されています。宮務法廃止に伴い、昭和二十二年五月三日付宮内府長官官房文書課発第四五号依命通牒で「皇室令及び附属法令廃止に伴い事務取扱に関する通牒」【P42資料3】が出されました。第三項では「従前の規定が廃止となり、新しい規定ができないものは、従前の例に準じて、事務を処理すること」と記されており、宮務法が廃止になった後も、その内容は尊重され、宮中での祭祀や儀式は行われています。また、昭和二十二年五月三日政令第一号で出された「皇統譜令」の第一条でも「この政令に定めるものの外、皇統譜に関しては、当分の間、なお従前の例による」と定められています。皇統譜令は、明治の考証にもとづき大正年間に宮務法として制定されましたが、他の宮務法と共に廃止されました。新たに出された政令として従前の例に倣うことが明確に示されています。このような現

状に鑑みても、戦前の宮務法の内容に即した形で儀式等が斎行されることが、皇室の伝統を守る上で最も良い方法であると思います。

◆諸儀式をどのように理解するのか

まず、「讓位―踐祚」をどのように考えるのかという点について、言葉の意味から説明します。「踐祚」と「即位」という言葉がありますが、語義上はどちらも「皇位に就く」との意味です。では、どのように違うのでしょうか。「踐祚」については、『増補 皇室事典』では、「皇位は寸秒の隙なく連続するのである。故に踐祚は儀式ではなく事実であるとも申上ぐべきである」と記されています。また「即位」とは皇位に就き、このことを「内外に明らかにする」行為を指しており、同じ語義ではありませんが、内容が異なることが分かります。また、登極令では、附式の第二編で「即位礼及大嘗祭ノ式」と記されており、大嘗祭も即位に係る一連の儀式で

あると記されています【P35資料1・附式】。尚、改元も踐祚から即位の一連として含まれるものと考えられます。

次に、「空位（皇位の連続性の中断）」についてふれておきたいと思います【P51図2】。今般の御代替について、四月三十日付で天皇陛下が御讓位され、五月一日付で皇太子殿下が御即位されることで空位が発生するとの指摘もあります。しかし、このような場合でも空位は発生しないものといえます。まず、「諒闇の登極」において、天皇の崩御に伴い、新帝は直ちに踐祚します。同様に、「受讓の即位」においても、讓位（退位）により御位を退くということなので、退かれたと同時に踐祚が行われ、空位は発生しません。今回の特例法においても「天皇は、この法律の施行の日限り、退位し、皇嗣が、直ちに即位する」と定められており、空位が発生しないよう法律の文言も工夫がされています。また、この他にも、皇位の証である剣璽等について、どのタイミングで手放すのかということで議論が

あつたと思います。当初は、御退位の三十日に剣璽等を手放すための儀式を行うことも検討されましたが、今般の基本方針でも、剣璽等を手放す儀式は行わないことが示されています。

次に、「讓位（退位）」と「即位（踐祚）」の儀式をどのように考えるべきかについて説明します【P52図3】。今上陛下の例では、剣璽等承継の儀が行われ、その後、即位後朝見の儀、日を空けて、秋に即位式が国事行為として行われ、儀式それぞれに付随する形で、皇室行事として行われる神事があります。まず、剣璽等承継の儀に付随する儀式としては、「賢所ノ儀」、「皇靈殿神殿ニ奉告ノ儀」が宮中祭祀として行われ、即



位式に付随するものとしては「大嘗祭」が行われています。尚、政府の見解では、大嘗祭は天皇の行為中「その他の行為」に分類はされるも「公的性格・公的色彩を有する行為」とされています。しかし、剣璽等承継の儀に付随する「賢所ノ儀」、「皇靈殿神殿ニ奉告ノ儀」が、天皇が行う通常の「その他の行為」に分類されています。しかし、本当にこれが良いのでしょうか。これらの儀式は、大嘗祭と同様に即位に係る国事行為を裏付けする重要な儀式です。また、即位にかかる儀式が国事行為として行われることに鑑みれば、「退位」にかかる儀式も当然国事行為として行われるべきであって、「退位礼正殿の儀」が国事行為として行われることも納得できると思います。

次に、「讓位（退位）」の儀式はどのように構成されるかについてですが、歴史的にみて、儀式の具体的な構成や内容については、時代に応じた変遷はありますが、重要な根幹は「讓位の宣命」と「神器の奉遷」があったという点であると思います。「讓

を離れられるという皇室の大事・国の大事に際して、おそらくは何らかの神事・祭祀が行われるものと思われます。現段階では何も決まってはいませんが、検討されているものと思います。

◆改元をどのように考えるのか

改元については、既に御存知の方も多いかと思いますが、一世一元の制度について、明治改元の詔書では「今より以後、舊制を革易し、一世一元、以て永式と為す」とあり、改元は、御代替により、一世一元でなされるものということが示されています。

今般の改元の手続きについては、疑問があります。現在の報道等では、元号は、事前に決定・公知し、五月一日の即位とともに施行すると報じられています。元号がどのように発布されるかについては、昭和五十四年六月に発布された元号法で示されています。元号法では、元号は政令で定め「皇位の継承があつた場合に限り改める」とされており、閣議

位の宣命」については、様々な意見がありますが、過去の天皇の讓位の宣命の例からみれば、四つのポイントが伺えます。それは、①皇位を退くという意思表示、②皇太子またはそれに準ずる方に皇位を譲るということ、③それを臣下が輔弼するということ、④皇位を退いた暁には上皇号を辞退するということ、の四点です。基本的には、歴代この形で讓位が行われてきました。しかし、今般の御代替においてはこのような形で宣命が出されるとは思えません。「讓位の宣命」という形ではなく、おそらくは、「即位後朝見の儀のおことば」や、「即位礼正殿の儀のおことば」に準ずる形で「おことば」が示されると思います。

次に宮中で神事・祭祀がどのように行われるかについてですが、先程も説明したように、即位（踐祚）については、これらに付随する神事・祭祀が適切に行われるものと思われます。しかし、讓位（退位）に付随する神事・祭祀については旧皇室典範や登極令等にも、規定がありません。但し、天皇が御位

決定された新元号をあらかじめ天皇に上奏した後、に御名御璽を以って政令として公布されます。

仮に平成の御代において、新元号が決定・公布するとなれば、新元号について裁可を下すのは今上陛下となります。やはり、天皇陛下の治世、御代を表す元号は、新帝の裁可を以って新帝の御名御璽により決定・公布されるべきであると思います。手続きとしては様々なやり方・考え方があるかと思いますが、事前に閣議決定だけをし、五月一日の新帝即位を以って政令として公布するのは、可能かとも思います。元号は天皇の治世、御代を表すと同時に、関連性はないとされていますが、天皇の追号としても使用されています。今上陛下は自動的に「平成天皇」となると思われている方がいると思いますが、直接的な因果関係はありません。おそらくは、今上陛下が崩御された時には「平成」と追号されることと思います。紛れもなく「平成」は今上陛下の治世であり、平成の元号を公布されたのは今上陛下です。次の御代の元号を決める上

で、どのような手続きが適切なのか、これから議論がされていくと思います。個人的な意見ではありますが、次の御代の元号は次の御代の天皇に決めていただくことが良いと思います。歴史上、二百四十以上の元号がありますが、事前に決定した元号は原則ありません。改元は、天皇のみが行えることであり、平成の御代を決定する上でも、その手続きは守られていたと思います。これまでの歴史と伝統を確認し、適切な形で、元号が決定されるよう、国会議員の皆さんには、様々な御議論をしていただければと思います。

◆ 剣璽の取扱いについて

これは今後の検討になっていくと思いますが、一般の御代替の大嘗祭の後、神宮、神武天皇陵及び明治天皇、大正天皇、昭和天皇の山陵にもお参りされるものと思います。その中で、剣璽が共にあるのか否か、これは非常に重要な問題であると思います。

だけで事前に発表したという事実は残すべきではないと思います。正しい改元の手続きと考える上で、どのような方法が考えられるのか、御教授いただければと存じます。

A1

明治以降、大正、昭和、平成への三回の改元が行われましたが、新しい元号については、何れも、水面下で調整をされ、踐祚の当日に発表する形を採用しています。事前に準備をすることは決して間違いではありませんが、公にすることは違うのではないかと思います。また、新元号になっても「平成」が用いられるのも問題はありません。例えば、皆さんは運転免許を持っていると思いますが、免許証の有効期間で、「平成三十三年〇月」までであったとしても、決して公的な証明書として間違っているわけがなく、改元が行われれば失効するわけでもありません。その意味では、改元後であっても「平成」の表記が続く

ます。神武天皇二千六百年式年祭の際には、剣璽の御動座はありませんでした。また明年、一月七日には、昭和天皇三十年式年祭が斎行され、今上陛下は山陵をお参りされると思いますが、剣璽の御動座があるのか、注視しておかねばなりません。明年の式年祭において、剣璽の御動座が実現することを願って止みません。

質疑応答



Q1

一般の御代替について、国民の関心は改元にあると思います。今回は、カレンダー業界の要望など、世俗的な理由を受けて、事前に発表をする流れとなっていますが、私は、本来あるべき手続きにもとづいて、改元を行うべきであると思っています。後世に残ることであり、カレンダー業界からの要望等、世俗的な理由

Q2

ことはおかしいことではないと思います。

御代替の読み方については、自民党内で開催した勉強会でも、「おだいがわり」ではなく「みよがわり」でなかったか、と質問しました。この点について、政府は「昭和、平成の御代替も「おだいがわり」として行ってきたので、今回も準拠する形で考えている」と答弁しており、過去の例に固執していると思います。浅山先生の御指摘にもあるように、直近の例に倣うことは重要ですが、その場合、読み方は「おだいがわり」となってしまい、彼らのロジックを増強することになってしまいかねないので、どのようにすれば良いか、悶々としているところです。しかしながら、平成の御代に生きる国民として、その気持ちを共有していけるよう機運を醸成して参りたいと思っています。その上で、二点伺いをさせていただきます。

A2

まず、「践祚」と「即位」との言葉の使い分けについて、かなりこだわって分ける方もいますが、こだわることにとどのような意味があるのか、真実はどこにあるのか、私自身分かりかねています。祭祀との関連など、こだわる理由があるのならば、その部分について教えていただきたいと思っています。

もう一点は、皇位継承の正当性について、正統性を継承する上で、神器の継承があると思いますが、改めて「神器とは何か」ということを国民に説明する場合、どのように説明すれば良いのでしょうか。皇位の正当性と神器の関連について教えていただければと思います。

まず、「践祚」と「即位」の違いについて、先程も述べたように、語義としては変わりません。しかし、古来、御代替においては、天皇崩御の後、諒闇の期間があることを前提としていたので、践祚と即位の使い分けがなされて

が発生しないよう直ぐに御位に就かれること（践祚）が大事であり、今上陛下の例で見ても、陛下は昭和天皇崩御の当日には、早速、御執務を行われております。日本の歴史上、約千二百年にわたり、「御位を継ぐ」ということと、「御位を内外に宣明すること」を分けて考えてきたと思います。この視点に立ち、私は践祚と即位の言葉は、分けて使用すべきであると考えています。そして、即位に係る一連の儀式は、大嘗祭が終わったことで完了します。かつては、大嘗祭を行えなかった天皇を「半帝」と呼んだ歴史もありました。

もう一点、神器につきましては、旧皇室典範では「祖宗の神器」と記されており、歴代の天皇が継承してきたものであります。神器には「渡御」という言葉が使われ、神器は歴代の天皇の大御心にもとづき、天皇の御位とともに正當に継承されています。故に、神器の意味としては「御位に就かれる方が、正當に受

A3

これも適確にお答えすることは難しいと思います。やはり、諸儀式に関して、陛下の御意向が大きく影響することは間違いありません。数年前、陛下の御陵を縮小するという話がありました。ただ最終的には八割程度の大きさに縮小するという形になりました。今般の御代替の諸儀式が、簡素化ということであっても、「全くなくす」ということは

Q3

け継ぐべきもの」という説明が、相応しいのではないかと思います。

今般の御代替の諸儀式について、なるべく簡素に行うべきだとの意見があったと思いますが、何もかも簡素にしてしまつては取り返しのつかないことにもなりかねません。簡素にする中で、守らなければならない部分は何なのか、この点について、御見識をお聞かせいただきたいと思います。

Q4

ないと思います。ただ、今後の検討の中で、簡素化ということでの辺りまで縮小を図るのか、現段階ではまだ分かりかねる部分であると思います。尚、行事についても同様です。大正、昭和の御代替で行った行事と、平成の御代替で行った行事にも若干の違いがあります。どのような儀式や行事を行うのかは、現在の皇太子殿下が御即位された後に決めることであって、現段階では明言できないと思います。

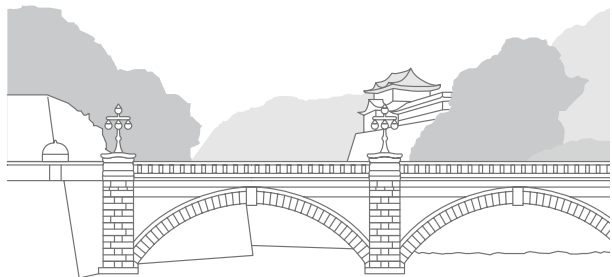
陛下の御意向を汲むということは大事なことであると思います。しかし、敢えて申し上げさせていただきますが、今上陛下の考えだけが御心ではないと思っています。大御心とは皇祖皇宗の御意思の総意であり、今上陛下の御意思であったとしても、大御心と異なる場合は、然るべき方が陛下に御進言申し上げるべきであると思います。陛下の御意向

います。確かに時代に応じた変革は必要ですが、安易な改正等は後世に疑義を残すものであり、変更する時には、是非とも慎重な議論がなされることを望んでいます。

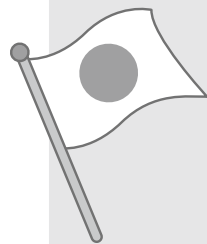
A4

ということであれば何でも良いわけではなくて、この辺りは非常に慎重に判断をしなければならぬと考えていますが、いかがでしょうか。

現在、御代替の諸儀式の問題について、明確に定めた法律等はありません。慣例に倣うということは一つの考え方ですが、一方で変革を余儀なくされる時代は、必ずやってくると思います。これまでも時代に応じて、陛下御一人の考えだけでなく、政府や学者など、陛下を輔弼する方々との協議の上で、変えられてきた例があります。実際に、旧皇室典範が廃止され、現在の皇室典範が制定される過程においても、慎重な検討がなされた上で制定されました。また明治に定められた登極令などの宮務法で定められたやり方で、御代替をはじめ天皇・皇室の神事・行事が、永久に行われていくということは考えにくいと思



「御代替」についてⅡ



今般の御代替の考え方等については、前回の勉強会(四月十二日開催)である程度説明をしましたので、今回は切り口を変えて、別の視点で説明します。

今般の御代替について考える上で、何を基準・手本とするのかということは一番大事な部分であると思います。歴史を振り返って見れば、御代替の「かたち」については、その時代毎に検証と再確認を重ね、現在に至っています。明治時代には、様々な皇室令・宮務法が整備され、一つの法体系を確立していました。しかし、これらは敗戦により一切失われてしまいました。戦後、その一部分は、現在の皇室典範や憲法に盛り込まれますが、大部分は、慣例と前例にもとづくものとされました。この点については、このままで良いのかという疑問は残りますが、御代替を考える上で、明治四十二年に制定された登極令が好例だということをまず前提とすべきであるとさせていただきます。

歴代の御代替において、「何が重要で、何を守っていかなければならないのか」ということは、常に考

えられてきました。これまでの百二十五代で全く同じ「かたち」は無かったと思います。それまでの歴史的経緯も踏まえ、整備されたのが明治の登極令をはじめとする皇室令・宮務法でした。しかし、今般の御代替において、すべてを旧「登極令」通行に行わなければならないということではありません。当然、現代に応じた「かたち」にすべく、アレンジを加えていく必要もあるでしょう。伝統とは「かたち」のみにこだわるのではなく、その中に存在する精神を再確認し継承していくことであると考えることが大切だと思います。



◆「践祚ノ式」とは何なのか【P35資料1・附式】

明治の登極令の附式では、第一編に「践祚ノ式」、第二編に「即位礼及大嘗祭ノ式」が定められています。つまり、天皇陛下が御位に就くということは、「践祚ノ式」「即位ノ礼」「大嘗祭」の三つを経て完了することになります。では、それらはどのような構成になっているのか、という点について注目してみたいと思います。「践祚ノ式」は、「賢所ノ儀」「皇靈殿神殿ニ奉告ノ儀」「剣璽渡御ノ儀」「践

祚後朝見ノ儀」の四つの儀式で構成されています。これらの儀式の完了を以って「践祚」が完了することになります。但し、これら儀式が終わっていないからといって践祚が行われていないわけではありません。践祚とは御位を承ける「事実」です。崩御直後、まず「践祚」し、後に「剣璽渡御ノ儀」「践祚後朝見ノ儀」が行われます。つまりは、践祚の事実を得た後に「践祚の儀式」が行われます。これは、崩御によって空位を発生させないように、また、皇位が途切れることのないように、直ぐさま践祚を行うと

いうことです。今回の御代替においては、崩御ではなく讓位（退位）となりますが、讓位においても空位の発生は許すものではありません。特例法と施行期日を定める政令では、四月三十日の限りを以って退位と定めています。秒単位で考えることはあまり望ましくはありませんが、四月三十日の終わりを以って退位し、五月一日のはじめを以って即位をするのであり、空位は生じず連続するものと考えることが大事であると思います【P51図2】。

◆儀式は宗教性を帯びるのか

踐祚の儀式「賢所ノ儀」「皇靈殿神殿ニ奉告ノ儀」は宗教性を帯びるのではないかとの指摘があります。確かに、「賢所ノ儀」「皇靈殿神殿ニ奉告ノ儀」は宮中三殿で行われます。また、皇祖である天照大御神、歴代の皇靈に対して奉告が行われますので、宗教性を帯びるといえば、その通りだと思います。

平成の御代替では旧「登極令」で定める「賢所

当時では洋装の大礼服や軍服、それに準ずる服などを指しますが、現在ではモーニング等が該当します。この際には、「式部長官宮内大臣前行シ侍従長侍従侍従武官長侍従武官御後ニ候シ皇太子又ハ皇太孫以下之二倣フ親王王供奉ス」とあり、皇太子様以下が陛下に続き列をなすことが定められています。

次に「劍璽渡御侍従奉仕国璽御璽之二従フ内大臣秘書官捧持」とあり、劍璽、国璽御璽が捧持され、御前の案上に置かれます。

次に「入御式部長官宮内大臣前行シ侍従劍璽ヲ奉シ侍従長侍従侍従武官長侍従武官御後ニ候シ皇太子親王王供奉ス」と定められています。入御とは、天皇陛下が部屋を出られることを指します。この際、劍璽が侍従により奉持され陛下がそれに続きます。

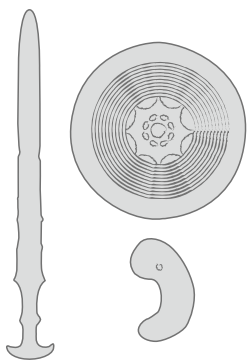
この儀式が宗教性を帯びるのか否かについては、劍璽に宗教性が帯びると考えれば、儀式全体も宗教性を帯びることとなります。しかし、まず以って

ノ儀」「皇靈殿神殿ニ奉告ノ儀」を除いた「劍璽渡御ノ儀」「踐祚後朝見ノ儀」が、国事行為として行われています。

しかし、この「劍璽渡御ノ儀」「踐祚後朝見ノ儀」についても、宗教性を帯びるのではないかとの一部からの指摘もあります。現代の言葉でいえば、「劍璽等承継の儀」と「即位後朝見の儀」となるわけですが、本当に宗教性を帯びるのかという点については、しっかりと考えておかねばならないと思います。

「劍璽渡御ノ儀」の儀註【P37資料1・儀註①】を見れば、まず、「時刻賢所第一日ノ式ヲ行フト同時大勲位国務各大臣枢密院議長元帥便殿ニ班列ス」とあり、劍璽渡御ノ儀と同時にその裏付けとして宮中での神事が行われていることが記されています。

次に、「出御御通常礼装又ハ御通常服御椅子ニ著御」とあり、ここでの服装は礼装です。礼装とは



劍璽は皇位を表す御印です。確かに、皇位が宗教性を帯びるといえば、劍璽も宗教性を帯びることになります。平成の御代替では、宗教性が帯びるものをさけようという議論があったことから、この点を踏まえ、名称を「劍璽渡御ノ儀」ではなく「劍璽等承継の儀」としました。また、「劍璽」を「劍璽等」とすることで、国璽御璽など、皇室経済法第七条で定める「皇位とともに伝わるべき由緒ある物」を含み承継する儀式としました。国璽御璽等の御物をも含む全とすれば、当然、その承継は宗教性を帯びないものとも考えることもできるかと思えます。また儀註には注意書きとして、「天皇未成年ナルトキハ供奉員中親王ノ上ニ摂政ヲ加ヘ襁褓ニ在ルトキハ女官奉抱シ摂政奉扶ス以下之二倣フ」と定めています。「襁褓」とは赤子のおむつを指します。「劍璽渡御ノ儀」には摂政が加わることがあり、現在の規定でも戦前の規定でも、摂政には女性皇族もなることができます。このようなことも戦前の規定では想定がされていたのです。

次に「踐祚後朝見ノ儀」についてですが、この儀式も御位を継いだ後に三権の長と顔を合わせる儀式であり、特に宗教性を帯びるものではありません。

また、「即位礼正殿の儀」で使用される高御座について、国民主権下において、天皇陛下が高御座の上から、国民を見下ろすのは何事かとの指摘もあるようです。現在の憲法では天皇は「象徴」とされています。そもそも「象徴」は我々が対等に見るものでしょうか。見上げるものでしょうか。それとも見下すものでしょうか。例えば、「象徴」である国旗については、一般的に目よりも高い位置で丁重に掲げるという認識があるのではないのでしょうか。最も尊い「象徴」の存在である天皇陛下ならば、我々は仰ぎ見るという形をとることが適切ではないかと思えます。

◆「踐祚（即位）後朝見ノ儀」の日時について

現在、政府の基本方針でも示されたように、五月一日に新帝が即位し、同日に「剣璽等承継の儀」と

の儀」が行われるのではないのでしょうか。具体的な日程については未定ですが、おおよそ正午までには終了することが予想されます。

◆「即位の礼」と「大嘗祭」について

今般の御代替において、「即位の礼」と「大嘗祭」には二十日ほど日程が空くこととなっています。平成、昭和、大正の事例を見ても、日程には若干の空きがあります。即位の礼から、大嘗祭へと連続して行われていると考えられます。

今般、五月一日に新帝が即位され、同年の十一月に大嘗祭が行われるわけですが、この点については、それが可能なのかという疑問が出てきます。通例でいうならば、崩御を伴う踐祚の場合、諒闇が明けるとまで晴れやかな儀式を行うことはありませんが、諒闇が明けた後に速やかに行うこととされています。尚、今般の譲位による踐祚には諒闇が伴いません。また古く「延喜式」の規定によれば、「七月以前に

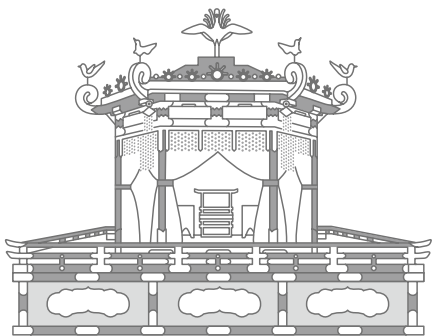
「即位後朝見の儀」が行われます。これらを同日に行うことが良いのか否かについても幾分議論があるようです。

「踐祚後朝見ノ儀」は、大正の御代では、踐祚の翌日に行われています。昭和の御代では二日後、平成の御代では三日後となっており、一定はしていません。まずはきちんと行うということが重要であると思います。但し、共通する点としては、大正、昭和、平成のすべて、「踐祚（即位）後朝見ノ儀」は午前中に行われています。「朝見」とは天皇に家臣が拝謁をすることを意味します。必ず午前中に行わなければならないということではありませんが、このような重要な儀式は午前中に行うことが良いと思いますし、近々の例でもこの点は踏襲されています。

今般の御代替において、「即位後朝見の儀」が午前中に行われるとなれば、おそらくその前に「剣璽等承継の儀」は午前十時頃から行われるのではないかと拝察されます。その後、速やかに「即位後朝見

位に即きたまはば当年事を行ひ、八月以後ならば明年事を行へ。〔此れ受讓の即位に拠る。諒闇の登極を謂ふに非ず。〕とされています。これは、御位に就いたらなるべく速やかに大嘗祭を行いなさいという規定と読めます。これにもとづけば、五月一日に踐祚し、同年に大嘗祭を行うことは必ずしも不適切ということではありません。

しかし、近々の譲位の例、光格天皇の譲位（文化四年三月）による仁孝天皇の大嘗祭でいえば、諒闇はありませんでしたが、大嘗祭は踐祚の当年に行われていません。近世以前の譲位でも、大嘗祭を行うのは踐祚の翌年とすることが通例となっていました。何故かといえば、それは費用の問題があったからです。大嘗祭を行う上でやはり費用面の



問題は生じます。江戸時代には大嘗祭の費用については、幕府が支出をしていました。室町時代には、幕府若しくは各地の大名が寄進をするというルールになっていました。中世以前、朝廷の力がまだ強かった時代には、臨時の課税の措置がとられた例もあります。応仁の乱以降、朝廷の力が弱まった時代においては、大嘗祭が行われないという時代もありました。大嘗祭の費用工面は平安時代からの、懸案事項の一つであったと思われます。

◆「齋田点定の儀」をどのように考えるか

大嘗祭を行う上では、占により、まず悠紀国・主基国が定められ、その国の田んぼから収穫した米を以って大嘗祭が行われます。今般の御代替が五月一日に行われるということは、平安時代の「延喜式」の規定を援用しない限り、二月の祈年祭（種まき）までに、大嘗祭に使用する米を収穫する齋田を決めることはできません。

平成の御代における大嘗祭では、まず一月二十三日に「即位礼・大嘗宮の儀等の期日告示」が行われています。同日に「賢所及び皇靈殿神殿に期日奉告の儀」が宮中三殿で行われています。平成の御代替の際と同じように進めば、齋田の祭り、収穫を願う祭りがスムーズに進みます。

しかし、今般の大嘗祭については、新帝が即位される五月一日以降に検討が始められることが予想されます。あらかじめ「齋田点定の儀」を行うということも考えられますが、おそらくは新しい御代の事は新しい御代になってから決まるものと思います。それが一つのルールではないかとも思います。

齋田点定の期日について、その歴史を遡れば、明治天皇の「齋田点定ノ儀」は五月二十二日に行われています。また、後桃園天皇の御代においては、九月八日に行われています。旧暦の九月に行ったということは、ある程度、米の実りを確認してから齋田点定を行ったのではないかと考えられます。

す。このように過去の事例から見れば、五月以降でも齋田点定を行うことは可能であると考えることが出来ます。但し、大正以降の三代の例のように、齋田で行われる諸儀式等に関して、きちんと行えるのか否かという点については、熟慮・検討が必要であると思います。

また、大嘗祭の期日奉告についても、踐祚後、速やかに行われるのではないのでしょうか。

◆「剣璽の御動座」をどのように考えるか

大嘗祭が終わった後には、「即位礼及び大嘗祭後神宮に親謁の儀」「即位礼及び大嘗祭後神武天皇山陵及び前四代の天皇山陵に親謁の儀」が行われます。今般の御代替においても、前例通り行われるものと思います。

「即位礼及び大嘗祭後神宮に親謁の儀」では、剣璽の御動座があります【P37資料1・儀註②】。また、「即位礼及び大嘗祭後神武天皇山陵及び前四代

の天皇山陵に親謁の儀」においても同様に剣璽の御動座が行われています【P39資料1・儀註③】。天照大御神をお祀りする神宮は特別な存在です。天皇陛下にとつて、天照大御神は直系の御祖先にあたります。また、即位にあたって特に近い御祖先の山陵に親謁をするというルールがあります。

また、「皇室祭祀令」にもとづく歴代天皇の式年祭においては、「山陵の儀」が行われますが、ここでも、天皇陛下とともに剣璽が御動座することとなっています【P48資料4・儀註④】。ちなみにこの「山陵の儀」に関しては、大正天皇三十年式年祭にあたり、『昭和天皇実録』には合議によって削除されたとありますが、陛下とともに剣璽が御動座することとは非常に重要なことです。今般の御代替においても剣璽の御動座が実現されるよう切に願うところであります。

◆「国の行事」と「皇室の行事」の位置付け

踐祚・即位にかかる一連の儀式は、国の行事と

して「国事行為」で行う儀式と、皇室の行事として「その他の行為」で行う儀式に分けられます。このように区分する必要があるのかについては、平成元年の「内閣・即位の礼準備委員会」の「検討結果」に則して考えるならば、区分せざるを得ないと思います。それが、三十年前に「現代的な在り方」を加味して決定された結果です。

しかし、その検討結果については、否定的に捉えるのではなく、むしろ肯定的に捉えるべきであると思います。当時、政教分離を厳格に履行すべきという風潮の中、大嘗祭を政府も注目する公的色彩を含む重要な儀式として捉え、天皇の行為中「その他の行為」とはいえ、「公的性格・公的色彩を有する行為」として、公費である宮廷費から費用を支出することが妥当であると判断しました。この点については括目すべきであると思います。

現行法制上と昭和二十一年以前の「皇位の継承」の法的根拠を比較しても、「世襲」であるということが共通しています。この「世襲」の意味に則れば、

この国の歴史・伝統なのです。

神社本庁から発行している『国やすかれ民やすかれ』という冊子があります。宮中のお祭りというのは、「国やすかれ民やすかれ」の理念を以って行われているのであり、陛下の重要なお務めです。その理解に立ち考えた時、天皇の宮中祭祀が、天皇の行為中「その他の行為」の「それ以外の行為」に分類されることとはどうなのかと思います。大嘗祭と同じく、宮中祭祀、特に新嘗祭については、公的性格・公的色彩の濃いものであるということが理解され、そのように整備されていくことが望まれます。

質疑応答



Q1

我々が国民と接する時に、どういう形で大嘗祭をはじめ御代替のことを伝えたら良いのかということを考えていました。しっかりと

皇位の継承は、「日本国の象徴」及び「日本国民統合の象徴」としての地位の継承であるとともに、「皇家の長」の継承でもあります。

大嘗祭とは、単に個人的に天皇が行う儀式ではなく、踐祚・即位にかかる国の儀式の重要な裏付けであるということが、平成元年の政府の「検討結果」からも読み取ることができます。だからこそ、「公的性格・公的色彩を有する行為」として位置づけられたのであり、経費の支出が可能とされたのです【P52図3】。

平成二年、国会で行われた答弁の中で、大嘗祭は毎年行われる新嘗祭とは性格を異にするという趣旨の発言がありました。しかし、その一方で大嘗祭とは「二世二代の新嘗祭」であり、当然、共通の意味も持ちます。今上陛下におかれては、平成の御代の最初の新嘗祭として大嘗祭を行い、その後も現在に至るまで、毎年、新嘗祭を行われてきました。御歴代の御代においても、大嘗祭をはじめとして、新嘗祭が毎年の重事として行われています。それが、

A1

勉強した上で学術的に説明できれば良いのですが、国民に向けて簡単に説明するとした場合、何を重要視し、何を国民に伝えれば良いか、この点について御示唆いただければと思います。

非常に難しく大切な問題だと思います。この点については、天皇陛下が祖先の方々と約束をされる大切な儀式だということ、天皇の御位に就くということは、これまでの御歴代の気持ちを受け継ぐことを約束されることであり、これを行う場が大嘗祭であると説明されてはいかがでしょうか。御参考にしていただければと思います。

Q2

現在、全国で行われている神社界の行事に出席をすると、「天皇陛下御即位三十年記念」という冠がついていることをよく見かけます。私の記憶が正しければ、平成二十一年十一

Q3

大嘗祭の悠紀国、主基国が占で決定されるということでしたが、どのような占で決められるのか、教えていただきたいと思います。悠紀田、主基田を決めて五穀豊穡の祈りを捧げることがなぜ重要なのかということ、私たちは少しでも国民に伝えていかなければならないと思いますが、その上で、先生のような学術的な説明ではなくて、広く国民に理解していただくにはどのように

A2

原則論でいえば、「即位の礼」の日が基軸になります。しかし、来年の十一月では既に新帝の御代となっております。ここから先はどのように考えるかということになりますが、例えば一月七日を即位の日として考えることもありますが、この日は昭和天皇の崩御日でもあります。政府は、明年二月二十四日に今上陛下の御在位三十年の記念式典の挙行を予定しています。ただ、この日は昭和天皇の御大喪の日にあたります。これより一週間前となれば祈年祭にあたり、一週間後となれば三月にかかってしまう…。明確なことは言えませんが、難しい問題ではありますが、今般の記念式典の日程については、世俗的な事情であると思います。

また、神社界の諸行事で「天皇陛下御即位三十年」の冠を掲げているのは、明年に向けて奉祝の機運を高めていこうとの意味合いがあります。

もう一点、剣璽については、「祖宗の神器」として、鏡・剣・玉を以って御位の証として考えてきました。故に、これらを正當に承継継ぐということが、皇位の正統性を表すこと

A3

説明すれば良いか教えていただきたいと思っています。

悠紀田、主基田については、色々と定義がありますが、極論をいえば、日本全国各地であつても構わないと思います。この国の実りを陛下が神様に供されることに意味があります。日本全国どこでも良いですが、それでは広過ぎるので、代表となる悠紀田、主基田を決めています。更に明治の御代から、「庭積机代物」として悠紀国、主基国以外の国からも様々な物が献納されています。これは大正、昭和、平成の御代の時にも同様に行われました。今般の御代替においても、同様に庭積机代物が実現されるよう、働き掛けていただければと思います。

Q3-2

何をどのように働き掛けすれば良いでしょうか。

A3-2

平成の御代においては、庭積机代物として大嘗祭へのお供えが全国各地から寄せられました。当時、庭積机代物として供物を受けるといふ趣旨の通知が宮内庁から出されていたかと思えます。今般の大嘗祭においても、平成の大嘗祭同様に庭積机代物の供物が行えるよう働き掛けをお願いできればと思います。

Q4

皇位とともに伝わるべき由緒あるものについて、質問します。皇室経済法第七条では「皇位とともに伝わるべき由緒ある物は、皇位とともに、皇嗣が、これを受ける」と定められており、約六百件近くあると聞いています。その中で、内宮の御鏡は御由緒物ですが、外宮、別宮の御鏡は含まれていなかったと思います。本来は、これらも御由緒物として含むべきであると思います。先般、宮内庁に確認したところ「法制局と相談する」とのことでした。

A4

たが、法制局にそのような権限があるのかと感じました。この点、学問的にはどのように考えれば良いのでしょうか。

Q5

憲法二十条三項の政教分離規定がある中で、民法第八九七条では、祭祀に関する権利の承継として「系譜、祭具及び墳墓の所有権は、前条の規定にかかわらず、慣習に従って祖先の祭祀を主宰すべき者が承継する。ただし、被相続人の指定に従って祖先の祭祀を主宰すべき者があるときは、その者が承継する」と定めており、非常にあやふやな部分があるのではないかと思えます。そもそも、神道は宗教ではないので、政教分離を想定していないのではないのでしょうか。

A5

宮中三殿の祭祀と神宮の祭祀は天皇の御位に直結する祭祀です。陛下にとっては、天照大御神は始祖としての御存在です。では祖先をお祀りすることに宗教性は帯びるのでしょうか。祖先のまつりは一般的な宗教とは意味が異なるのではないかと思えます。また、宮中祭祀は神道なのかといえば、神道の祭祀が宮中祭祀をなぞらえているという考え方もありますので、何とも言い難い部分ではあります。

Q6

ではないことを確認しました。天皇家の祭祀は一般の宗教とは異なると解釈していたことをお伝えさせていただきます。

【補足】平成の御代替では、葬場殿の儀は「皇室の行事」として、大喪の礼は「国の行事」として行われました。葬場殿の儀と大喪の礼について区別をするため、当時は、宮内庁と法制局で調整し、儀式の間に休憩時間を挟んで「鳥居」を撤去しました。但し、葬場殿の儀の費用を国費から支出することに関しては、津地鎮祭訴訟判決で示された目的効果基準を引用し、葬場殿の儀はあくまでも天皇家に伝わる儀式であり、特定の宗教を布教・宣伝するもの

御代替の儀式について、時代の変遷により形を変えることは仕方ないと思いますが、本来であれば古式に則り、あまり省略せずに行うべきであると思います。そもそも御代替の諸儀式は、現代を生きる我々だけのための儀式ではなくて、皇祖皇宗或いは天地の神々に対する儀式であると思います。かつては大嘗祭を行わなかった天皇は「半帝」と呼ばれていました。本来、天皇陛下のお務めは宮中祭祀であつて、国事行為を行うことは後付けされたことであり、国事行為ではなく宮中祭祀が天皇陛下のお務めの中心でなくてはならないと思います。国賓との晩餐会等を行うことも大切であると思いますが、秘事として宮中祭祀をお務めいただくことが何よりも大事であ

A6

だと思います。そう考えれば、天皇の行為で宮中祭祀が天皇の行為中「その他の行為」とされていることは本末転倒であると思うのですが、いかがでしょうか。

確かにそのように思います。そもそも現憲法の国事行為は、大日本帝国憲法の大皇大権を置き換えたものに過ぎません。しかし、天皇大権のうち皇室自治権については、戦前の皇室諸法令の廃止とともになくなっています。当時は、天皇陛下が皇室を率いているという法体系であったと思います。皇族を率いる天皇陛下と国民を率いる天皇陛下、二つの側面があったと思います。現在では国務に関することのみが残り、宮務に関することは全く無視され、宮中祭祀も私的な行為として扱われ、押し込まれているところに問題があると思います。これは皇室財産のこととも連動しますが、皇室を巡る問題は戦後、多く

について考えるきっかけにいただければ幸いです。

なったと思います。今一度、皇室に関するルール、皇室の存在や活動を担保する法律を考えなければならぬのではないのでしょうか。現憲法下では、天皇陛下をはじめ皇族の方々は「簿外の存在」と見ている人が多いと思いますが、それはある意味で当然のことです。しかし、その分の皇室への保障はしっかりと納められているのでしょうか。確かに毎年、皇室に対する予算は付けられています。本来はそういうものではないのでしょうか。戦後、国の復興のため、どれだけの皇室財産が国庫に編入されたのでしょうか。どうして皇室財産を自由に、自主的に使用することを出来なかったのでしょうか。確か皇室への寄付は皇室経済法等で制限がかけられていると思います。本当にこのままで良いのでしょうか。色々と考えなければならぬと思います。今般の御代替を通じて、色々な問題が出てくるかとも思います。が、改めてこのままで良いのかということに

第一回・二回 勉強会 講師紹介 浅山 雅司先生 御略歴

昭和四十四年、兵庫県出身。神社本庁主事。國學院大学文学部神道学科卒業、國學院大学大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期満期退学。

研究分野は、近世神道思想史、近世神道の通俗教化研究。國學院大学卒業後、國學院大学日本文化研究所助手を経て、平成十六年、神社本庁に奉職。研修課長、研究課長、研究祭務課長を歴任し、現在は、総合研究部長心得。また、平成十六年より國學院大学兼任講師も務める。主要論文は「石田梅岩の三教観について」や「近世神道の通俗教化研究の現状と課題」などがある。



資料

資料
1

登極令

資料
2

「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」に関する
神社本庁の基本的姿勢

資料
3

皇室令及び附属法令廃止に伴い事務取扱に関する通牒

資料
4

皇室祭祀令

図1

何を基準（前例）とするのか

図2

「諒闇の登極」と「受讓の即位」の差

図3

「即位（踐祚）」の「儀式」と「神事」の対応について

登極令（明治四十二年皇室令第一号）【条文は廃止時のもの】

裁可：公布：明治四十二年一月一日
施行：明治四十二年三月三日（公式令十一号）
改正（裁可日付）：昭和三十二年十二月三十日 皇十七
廃止：昭和三十二年五月二日（昭和三十二年皇十二）

第一条 天皇踐祚ノ時ハ即チ掌典長ヲシテ賢所ニ祭典ヲ行ハシメ且踐祚ノ旨ヲ皇靈殿神殿ニ奉告セシム

第二条 天皇踐祚ノ後ハ直ニ元号ヲ改ム

元号ハ枢密顧問ニ諮詢シタル後之ヲ勅定ス

第三条 元号ハ詔書ヲ以テ之ヲ公布ス

第四条 即位ノ礼及大嘗祭ハ秋冬ノ間ニ於テ之ヲ行フ

大嘗祭ハ即位ノ礼ヲ訖リタル後続テ之ヲ行フ

第五条 即位ノ礼及大嘗祭ヲ行フトキハ其ノ事務ヲ掌理セシムル為宮中ニ大礼使ヲ置ク

大礼使ノ官制ハ別ニ之ヲ定ム

第六条 即位ノ礼及大嘗祭ヲ行フ期日ハ宮内大臣國務各大臣ノ連署ヲ以テ之ヲ公告ス

第七条 即位ノ礼及大嘗祭ヲ行フ期日定マリタルトキハ之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告シ勅使ヲシテ神宮神

武天皇山陵並前帝四代ノ山陵ニ奉幣セシム

第八条 大嘗祭ノ齋田ハ京都以東以南ヲ悠紀ノ地方トシ京都以西以北ヲ主基ノ地方トシ其ノ地方ハ之ヲ勅定ス

第九条 悠紀主基ノ地方ヲ勅定シタルトキハ宮内大臣ハ地方長官ヲシテ齋田ヲ定メ其ノ所有者ニ対シ新

穀ヲ供納スルノ手續ヲ為サシム

第十条 稲実成熟ノ期至リタルトキハ勅使ヲ發遣シ齋田ニ就キ拔穂ノ式ヲ行ハシム

第十一条 即位ノ礼ヲ行フ期日ニ先タチ天皇神器ヲ奉シ皇后ト共ニ京都ノ皇宮ニ移御ス

第十二条 即位ノ礼ヲ行フ当日勅使ヲシテ之ヲ皇靈殿神殿ニ奉告セシム

大嘗祭ヲ行フ当日勅使ヲシテ神宮皇靈殿神殿並官國幣社ニ奉幣セシム

第十三条 大嘗祭ヲ行フ前一日鎮魂ノ式ヲ行フ

第十四条 即位ノ礼及大嘗祭ハ附式ノ定ムル所ニ依リ之ヲ行フ

第十五条 即位ノ礼及大嘗祭訖リタルトキハ大饗ヲ賜フ

第十六条 即位ノ礼及大嘗祭訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ神宮神武天皇山陵並前帝四代ノ山陵ニ謁ス

第十七条 即位ノ礼及大嘗祭訖リテ東京ノ宮城ニ還幸シタルトキハ天皇皇后ト共ニ皇靈殿神殿ニ謁ス

第十八条 諒闇中ハ即位ノ礼及大嘗祭ヲ行ハス

〔明治四十二年皇室令第一号附則ナシ〕

附 則（昭和二年皇室令第十七号）

本令ハ公布ノ日ヨリ施行ス

附式（抄出）

◆ 第一編 踐祚ノ式

賢所ノ儀
皇靈殿神殿ニ奉告ノ儀
剣璽渡御ノ儀（儀註①参照）
踐祚後朝見ノ儀



皇室の行事（その他の行為／それ以外の行為？）
皇室の行事（その他の行為／それ以外の行為？）
国事行為
国事行為
国事行為

◆ 第二編 即位礼及大嘗祭ノ式

賢所ニ期日奉告ノ儀
皇靈殿神殿ニ期日奉告ノ儀
神宮神武天皇山陵並前帝四代山陵ニ勅使発遣ノ儀
神宮ニ奉幣ノ儀
神武天皇山陵並前帝四代山陵ニ奉幣ノ儀
斎田点定ノ儀
斎田拔穂ノ儀
京都ニ行幸ノ儀

賢所春興殿ニ渡御ノ儀
即位礼当日皇靈殿神殿ニ奉告ノ儀
即位礼当日賢所大前ノ儀
即位礼当日紫宸殿ノ儀
即位礼後一日賢所御神楽ノ儀
大嘗祭前一日鎮魂ノ儀
神宮皇靈殿神殿並官国幣社ニ勅使発遣ノ儀
大嘗祭当日神宮ニ奉幣ノ儀
大嘗祭当日賢所大御饌供進ノ儀
大嘗宮ノ儀
悠紀殿供饌ノ儀
主基殿供饌ノ儀
即位礼及大嘗祭後大饗第一日ノ儀
即位礼及大嘗祭後大饗第二日ノ儀
即位礼及大嘗祭後大饗夜宴ノ儀
即位礼及大嘗祭後神宮ニ親謁ノ儀
即位礼及大嘗祭後神武天皇山陵並前帝四代山陵ニ親謁ノ儀
東京ニ還幸ノ儀
賢所温明殿ニ還御ノ儀
東京還御後賢所御神楽ノ儀
還幸後皇靈殿神殿ニ親謁ノ儀



※「剣璽」の御動座あり（儀註②参照）
※「剣璽」の御動座あり（儀註③参照）

●儀註① 剣璽渡御ノ儀

時刻賢所第一日ノ式ヲ行フト同時大勲位國務各大臣枢密院議長元帥便殿二班列ス

但シ服装通常服通常礼装関係諸員又同シ

次二出御御通常礼装又ハ御通常服御椅子ニ著御

式部長官宮内大臣前行シ侍従長侍従侍従武官長侍従武官御後二候シ皇太子又ハ皇太孫以下之二倅フ親王王供奉ス

次二剣璽渡御侍従奉仕国璽御璽之二従フ内大臣秘書官捧持

式部次長内大臣前行シ侍従武官扈從ス

次二内大臣剣璽ヲ御前ノ案上ニ奉安ス

次二内大臣国璽御璽ヲ御前ノ案上ニ安ク

次二入御

式部長官宮内大臣前行シ侍従剣璽ヲ奉シ侍従長侍従侍従武官長侍従武官御後二候シ皇太子親王王供奉ス
次二内大臣国璽御璽ヲ奉シテ内大臣秘書官捧持退下

次二各退下

(注意)天皇未成年ナルトキハ供奉員中親王ノ上二摂政ヲ加ヘ襦袢ニ在ルトキハ女官奉抱シ摂政奉扶ス以下之二倅フ

●儀註② 即位礼及大嘗祭後神宮ニ親謁ノ儀 ※「剣璽」の御動座あり

当日何時頓宮出御

次二天皇板垣御門外ニ於テ御下乗

式部長官宮内大臣前行シ御前侍従**剣璽ヲ奉シ**御後侍従御菅蓋ヲ捧持シ御綱ヲ張り御笏宮ヲ奉ス侍従長侍従侍従武官長侍従武官御後二候シ皇太子親王内大臣大礼使長官供奉ス衣冠単但シ侍従武官長侍従武官ハ正装

次二皇后板垣御門外ニ於テ御下乗

皇后宮大夫前行シ式部官御菅蓋ヲ捧持シ御綱ヲ張り女官御檜扇宮ヲ奉シ御後二候ス皇太子妃親王妃内親王王

妃女王大礼使次官供奉ス男子ハ衣冠単女子ハ桂袴

次二外玉垣御門外ニ於テ天皇皇后ニ大麻御鹽ヲ奉ル神宮欄宜奉仕

次二内玉垣御門内ニ於テ天皇皇后ニ御手水ヲ供ス侍従並女官奉仕

此ノ時祭主大少宮司正殿ノ御扉ヲ開キ御幌ヲ褰ケ御供進ノ幣物ヲ殿内ノ案上ニ奉安シ御階ノ下ニ候ス

次二天皇瑞垣御門内ニ進御

掌典長衣冠単前行シ御前侍従剣璽ヲ奉シ御後侍従御菅蓋ヲ捧持シ御綱ヲ張り御笏宮ヲ奉ス侍従長御後二候ス供奉員中皇太子親王王ハ瑞垣御門外ニ候シ其ノ他ノ諸員ハ内玉垣御門外ニ候ス

次二皇后瑞垣御門内ニ進御

掌典服装掌典長二同シ前行シ式部官御菅蓋ヲ捧持シ御綱ヲ張り女官御檜扇宮ヲ奉シ御後二候ス供奉員中皇太子妃親王妃内親王王妃女王ハ瑞垣御門外ニ候シ其ノ他ノ諸員ハ内玉垣御門外ニ候ス

次二天皇正殿ノ御階ヲ昇御大床ノ御座ニ著御侍従剣璽ヲ奉シ御階ノ下ニ候ス

次二皇后正殿ノ御階ヲ昇御大床ノ御座ニ著御

次二天皇御拝礼

次二皇后御拝礼

次二皇太子皇太子妃親王妃内親王王王妃女王拝礼

次二天皇皇后頓宮ニ還御

供奉出御ノ時ノ如シ

次二諸員拝礼

次二各退下

(注意)天皇襦袢ニ在ルトキハ正殿御階ノ下マテ女官奉抱シ大床ノ御座ニ著御ノ時ハ皇太后皇太后ナキトキハ内親王又ハ親王妃奉抱御拝礼皇太后ノ御服ハ皇后ニ同シ以下ノ二儀之ニ倅フ

●儀註③ 即位礼及大嘗祭後神武天皇山陵並前帝四代山陵ニ親謁ノ儀 ※「剣璽」の御動座あり

当日早旦陵所ヲ裝飾ス

時刻大礼使高等官著床

但シ服装京都ニ行幸ノ儀ニ於ケル賢所著床ノ時ノ如シ

次ニ神饌幣物ヲ供ス 此ノ間奏楽

次ニ掌典長祝詞ヲ奏ス

次ニ天皇頓宮出御

式部長官宮内大臣前行シ侍従・劍璽ヲ奉シ侍従長侍従侍従武官長侍従武官御後ニ候シ皇太子親王王内大臣大

礼使長官供奉ス

次ニ皇后頓宮出御

皇后宮大夫前行シ女官御後ニ候シ皇太子妃親王妃内親王王妃女王大礼使次官供奉ス

次ニ天皇御拝礼

次ニ皇后御拝礼

次ニ皇太子皇太子妃親王妃内親王王妃女王拝礼

次ニ天皇皇后頓宮ニ還御

供奉出御ノ時ノ如シ

次ニ諸員拝礼

次ニ幣物神饌ヲ撤ス 此ノ間奏楽

次ニ各退下

(注意)天皇皇后ノ御服及供奉員ノ服装ハ時ニ臨ミ之ヲ定ム

「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」に関する 神社本庁の基本的姿勢

今般、「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」が制定、公布された。法には、「退位」の語が使用されてゐるが、古くは律令に規定されてゐるやうに、「讓位」といふ語が公式かつ歴史的に用ゐられてきた。その事実を踏まへ、「退位」ではなく「讓位」の語を用ゐることが適切である。此の度、法の施行によつて「讓位」が現実のものとなるに際し、左の通り神社本庁の基本的な姿勢を明らかにするものである。

一、皇位の継承は、皇嗣が踐祚され祖宗の神器を承ける皇室・国家の重儀であり、皇室典範第二十四条の定める「即位の礼」は、御代替に関する伝統的な諸儀式のすべてを総称するものである。御代替に関する諸儀式については、皇室の伝統を踏まへ、かつ皇室制度上で最も整備された旧登極令等の規定に準拠することを第一に執行されるべきである。

二、長い歴史・伝統に由来する皇位の尊厳性に思ひを致し、即位礼、大嘗祭、大饗等、旧登極令に定められてゐる一連の皇位継承に関する諸儀式はもとより、旧登極令に定めのない「讓位」に関する儀式についても、皇室の先例を考証し、国家的重儀として執行されるべきである。

平成二十九年七月二十一日

神社本庁

皇室令及び附属法令廃止に伴い事務取扱に関する通牒

（昭和二十二年五月三日付宮内府長官官房文書課発第四五号依命通牒）

〔宮内府長官官房文書課高尾亮一〕

皇室令及び附属法令は、五月二日限り廃止せられることになったについては、事務は概ね左記により、取り扱う事になったから、命によつて通牒する。

一、新法令ができてゐるものは、当然夫々の条規によること。（例、皇室典範、宮内府法、宮内府法施行法、皇室経済法、皇室経済法の施行に関する法律、皇統譜令等）

二、政府内部一般に適用する法令は、当然これを適用すること。（例、官吏任用叙級令、官吏俸給令等）

三、従前の規定が廃止となり、新しい規定ができないものは、従前の例に準じて、事務を処理すること。（例、皇室諸制典の附式皇族の班位等）

四、前項の場合において、従前の例によれないものは、当分の内の案を立てて、伺いをした上事務を処理すること。（例、宮中席次等）

五、部内限りの諸規則で、特別の事情のないものは、新規則ができるまで、従前の規則に準じて、事務を処理すること。特別の事情のあるものは、前項に準じて処理すること。（例、委任規程、非常災害処務規程、宿直処務規程等）

八束清貫「皇室祭祀百年史」（『明治維新神道百年史』第一巻、百五十一頁、昭和四十一年、神道文化会）

皇室祭祀令

(明治四十一年)

皇室令第一号)

【条文は廃止時のもの】

裁可…明治四十一年九月十八日 皇二(宮内大臣副署)
 公布…明治四十一年九月十九日
 施行…明治四十一年十月九日(公式令十一号)
 改正(裁可日付)…昭二二年十月十四日 皇十二、
 昭二三年十二月二十二日 皇五十九

廃止…昭二二年五月二日(昭二二年皇十二)

◆第一章 総則

- 第一条 皇室ノ祭祀ハ他ノ皇室令ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外本令ノ定ムル所ニ依ル
- 第二条 祭祀ハ大祭及小祭トス
- 第三条 祭祀ハ附式ノ定ムル所ニ依リ之ヲ行フ
- 第四条 天皇喪ニ在ル間ハ祭祀ニ御神樂及東游ヲ行ハス
- 第五条 喪ニ在ル者ハ祭祀ニ奉仕シ又ハ参列スルコトヲ得ス但シ特ニ除服セラレタルトキハ此ノ限ニ在ラス
- 第六条 祭祀ニ奉仕スル者ハ大祭ニハ其ノ当日及前二日小祭ニハ其ノ当日斎戒スヘシ
- 第七条 陵墓祭及官国幣社奉幣ニ関スル規程ハ本令又ハ他ノ皇室令ニ別段ノ定アルモノヲ除クノ外宮内大臣勅裁ヲ經テ之ヲ定ム

◆第二章 大祭

- 第八条 大祭ニハ天皇皇族及官僚ヲ率キテ親ラ祭典ヲ行フ
- 2 天皇喪ニ在リ其ノ他事故アルトキハ前項ノ祭典ハ皇族又ハ掌典長ヲシテ之ヲ行ハシム

第九条 大祭及其ノ期日ハ左ノ如シ

- 元 始 祭 一月三日
- 紀 元 節 祭 二月十一日
- 春季皇靈祭 春分日
- 春季神殿祭 春分日
- 神武天皇祭 四月三日
- 秋季皇靈祭 秋分日
- 秋季神殿祭 秋分日
- 神 嘗 祭 十月十七日
- 新 嘗 祭 十一月二十三日ヨリ二十四日ニ亙ル
- 先 帝 祭 毎年崩御日ニ相当スル日
- 先帝以前三代ノ式年祭 崩御日ニ相当スル日
- 先后ノ式年祭 崩御日ニ相当スル日
- 皇妣タル皇后ノ式年祭 崩御日ニ相当スル日

第十条 式年ハ崩御ノ日ヨリ三年五年十年二十年三十年四十年五十年百年及爾後毎百年トス

- 2 神武天皇祭及先帝祭前項ノ式年ニ当ルトキハ式年祭ヲ行フ

第十一条 元始祭及紀元節祭ハ賢所皇靈殿神殿ニ於テ之ヲ行フ

第十二条 春季皇靈祭神武天皇祭秋季皇靈祭先帝祭先帝以前三代ノ式年祭先后ノ式年祭及皇妣タル皇后ノ式年祭ハ皇靈殿ニ於テ之ヲ行フ但シ先帝祭ハ一周年祭ヲ訖リタル次年ヨリ之ヲ行フ

2 神武天皇祭先帝祭先帝以前三代ノ式年祭先后ノ式年祭及皇妣タル皇后ノ式年祭ノ当日ニハ其ノ山陵ニ奉幣セシム

第十三条 春季神殿祭及秋季神殿祭ハ神殿ニ於テ之ヲ行フ

第十四条 神嘗祭ハ神宮ニ於ケル祭典ノ外仍賢所ニ於テ之ヲ行フ
2 神嘗祭ノ当日ニハ天皇神宮ヲ遥拝シ且之ニ奉幣セシム

第十五条 新嘗祭ハ神嘉殿ニ於テ之ヲ行フ
2 新嘗祭ノ当日ニハ賢所皇靈殿神殿ニ神饌幣物ヲ奉ラシメ且神宮及官国幣社ニ奉幣セシム

第十六条 新嘗祭ヲ行フ前一日綾綺殿ニ於テ鎮魂ノ式ヲ行フ但シ天皇喪ニ在ルトキハ之ヲ行ハス

第十七条 新嘗祭ハ大嘗祭ヲ行フ年ニハ之ヲ行ハス

第十八条 神武天皇及先帝ノ式年祭ハ陵所及皇靈殿ニ於テ之ヲ行フ但シ皇靈殿ニ於ケル祭典ハ掌典長之ヲ行フ

第十九条 左ノ場合ニ於テハ大祭ニ準シ祭典ヲ行フ

一 皇室又ハ国家ノ大事ヲ神宮賢所皇靈殿神殿神武天皇山陵先帝山陵ニ親告スルトキ

二 神宮ノ造営ニ因リ新宮ニ奉遷スルトキ

三 賢所皇靈殿神殿ノ造営ニ因リ本殿又ハ仮殿ニ奉遷スルトキ

四 天皇太皇太后皇太后ノ靈代ヲ皇靈殿ニ奉遷スルトキ

2 前項ノ規定ニ依リ祭典ヲ行フ期日ハ之ヲ勅定シ宮内大臣之ヲ公告ス

第三章 小祭

第二十条 小祭ニハ天皇皇族及官僚ヲ率キテ親ラ拝礼シ掌典長祭典ヲ行フ

2 天皇喪ニ在リ其ノ他事故アルトキハ前項ノ拝礼ハ皇族又ハ侍従ヲシテ之ヲ行ハシム

第二十一条 小祭及其ノ期日ハ左ノ如シ

歳旦祭 一月一日

祈年祭 二月十七日

賢所御神樂 十二月中旬

天長節祭 毎年天皇ノ誕生日ニ相当スル日

先帝以前三代ノ例祭 毎年崩御日ニ相当スル日

先后ノ例祭 毎年崩御日ニ相当スル日

皇妣タル皇后ノ例祭 毎年崩御日ニ相当スル日

綏靖天皇以下先帝以前四代ニ至ル歴代天皇ノ式年祭 崩御日ニ相当スル日

第二十二条 前条ノ例祭ハ式年ニ当ルトキハ之ヲ行ハス

第二十三条 歳旦祭ノ当日ニハ之ニ先タチ四方拝ノ式ヲ行ヒ祈年祭ノ当日ニハ神宮及官国幣社ニ奉幣セシム但シ天皇喪ニ在リ其ノ他事故アルトキハ四方拝ノ式ヲ行ハス

第二十四条 賢所御神樂ハ賢所ニ於テ之ヲ行フ

第二十五条 例祭及式年祭ハ皇靈殿ニ於テ之ヲ行フ但シ例祭ハ一周年祭ヲ訖リタル次年ヨリ之ヲ行フ

2 第十条第一項ノ規定ハ前項ノ式年ニ之ヲ準用ス

第二十六条 皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王親王妃内親王王王妃女王ノ靈代ヲ皇靈殿ニ奉遷

スルトキハ小祭ニ準シ祭典ヲ行フ此ノ場合ニ於テハ特旨ニ由ルノ外拝礼ヲ行ハス

2 前項ノ規定ニ依リ祭典ヲ行フ期日ハ之ヲ勅定ス

附式（抄出）

◆ 第一編 大祭式時ニ臨ミ儀注ヲ節略シテ之ヲ行フコトアルヘシ、第二編之ニ倣フ

賢所ノ儀
皇靈殿ノ儀
神殿ノ儀
新嘗祭神嘉殿ノ儀
新嘗祭前一日鎮魂ノ儀
神宮遙拝ノ儀
神宮ニ勅使発遣ノ儀
神宮ニ奉幣ノ儀

山陵ノ儀



※「劔璽」の御動座あり（儀註③参照）

山陵ニ勅使発遣ノ儀
山陵ニ奉幣ノ儀
神宮賢所皇靈殿神殿及山陵ニ親告ノ儀
神宮賢所皇靈殿神殿ノ造営ニ因リ奉遷ノ儀
皇靈殿奉告ノ儀
権殿ノ儀
皇靈殿親祭ノ儀

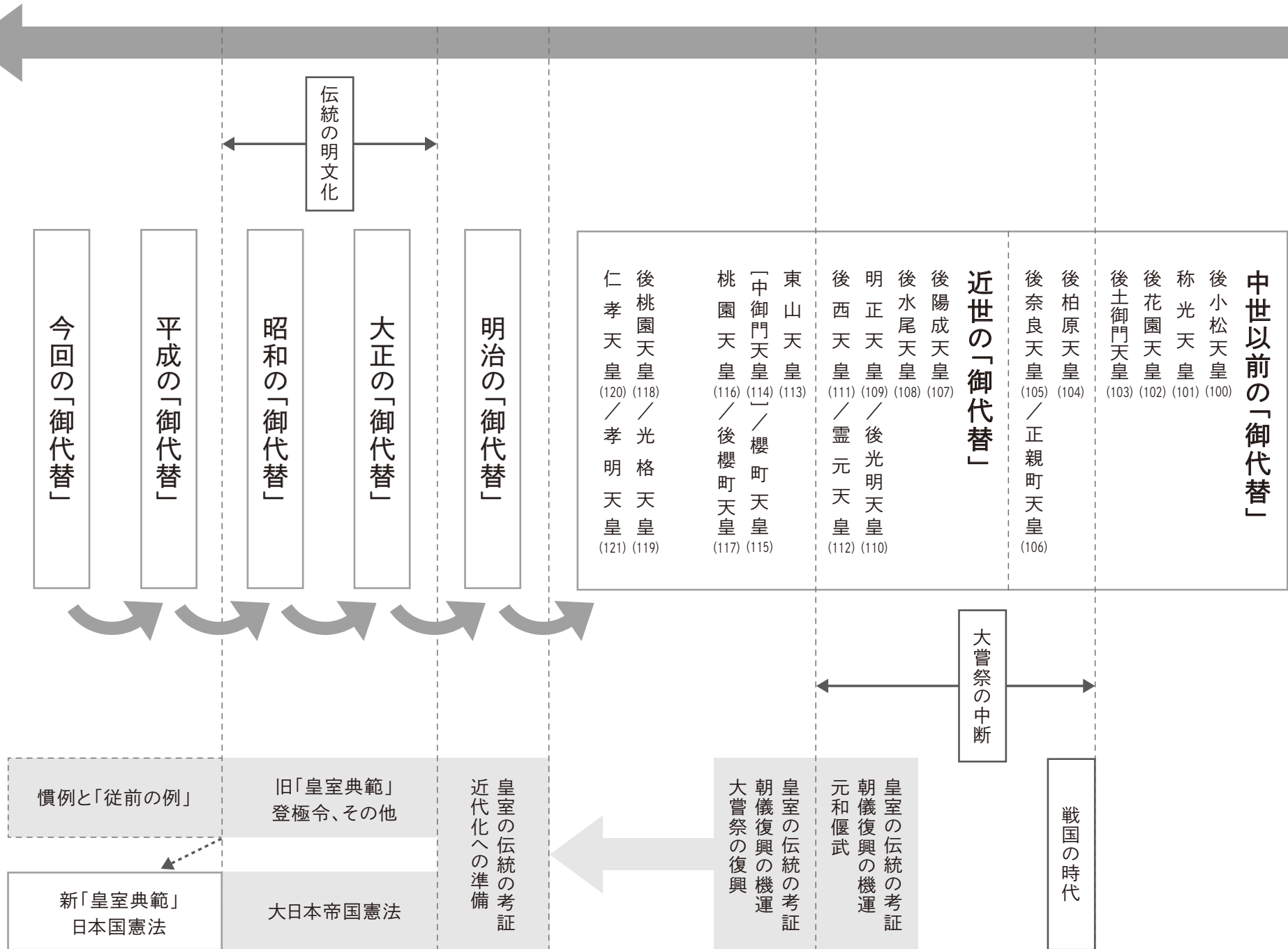
◆ 第二編 小祭

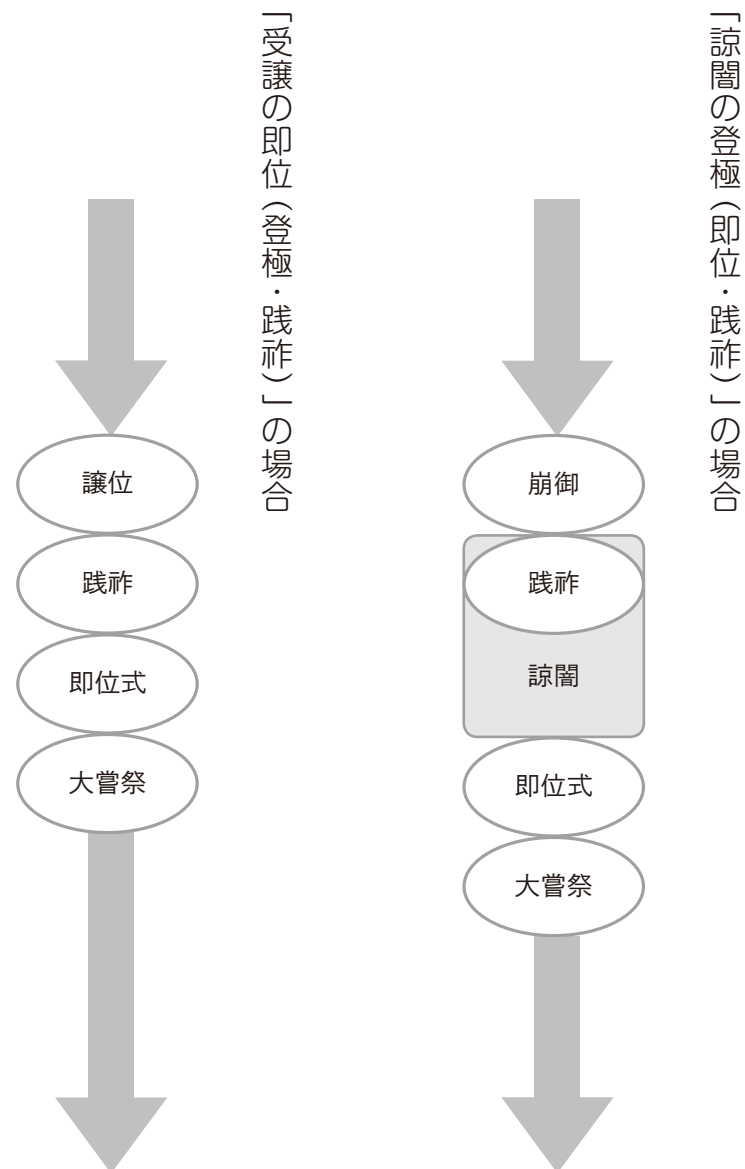
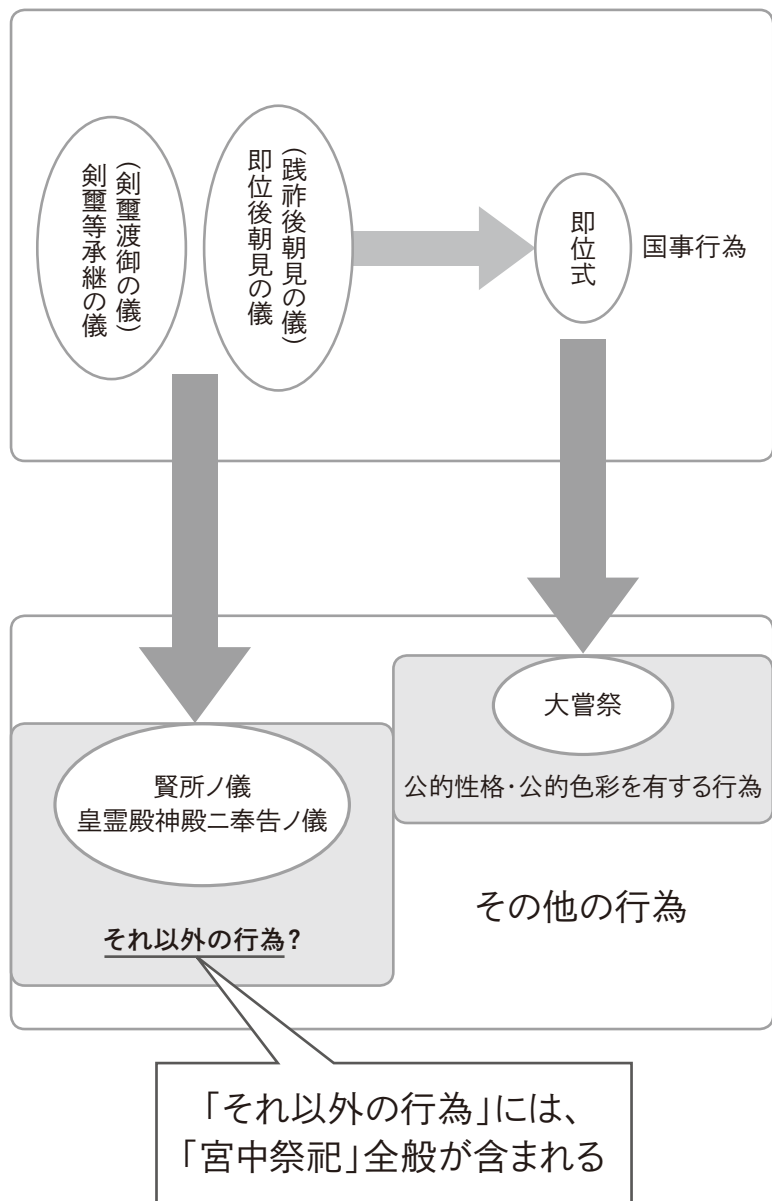
《以下、略》

● 儀註④ 山陵ノ儀 ※「劔璽」の御動座あり

当日早旦陵所ヲ裝飾ス
時刻諸員幄舎ニ参集ス
次ニ儀仗兵陵門外ニ整列ス
次ニ天皇御休所ニ著御
次ニ式部官前導諸員参進本位ニ就ク
次ニ神饌幣物ヲ供ス 此ノ間奏樂
次ニ掌典次長祝詞ヲ奏ス
次ニ出御御正装
式部長官宮内大臣前行シ**侍・從・劔・璽・ヲ・奉・シ**侍從長侍從御後ニ候シ親王王供奉ス
次ニ御拝礼御告文ヲ奏ス
次ニ親王王拝礼
次ニ入御 供奉出御ノ時ノ如シ
次ニ諸員拝礼
次ニ幣物神饌ヲ撤ス 此ノ間奏樂
次ニ各退下

何を基準（前例）とするのか





神道政治連盟国会議員懇談会活動報告
「御代替」現代の「かたち」を考える」

発行日 平成三十年六月十二日

発行人 神道政治連盟国会議員懇談会

神道政治連盟

一五一〇〇五三

東京都渋谷区代々木一―一二

TEL 〇三―三三七九―八二八二

